地域ぐるみで防災対策を

災害が発生したとき、交通網の寸断などにより、防災機関が十分に対応できないおそれがあります。そんなときに頼りになるのが「地域ぐるみの協力体制」です。日ごろから地域の防災活動に参加することが、自分の家族や家を守ることにつながります。

自主防災組織とは

自主防災組織とは、地域の人々が自発的に防災活動をする組織です。災害時はもちろん、災害後の避難所の管理・運営なども、その後の復興にも大きな力を発揮します。

北方町では、自治会が中心となって自主防災組織を結成、活動を行っています。

自主防災組織の役割

平常時

災害に備えるための活動をします。

- **防災知識の普及・啓発**
  防災訓練や講習会を通じて、正しい防災知識を住民に伝える。
- **地域内の安全点検**
  地域内の危険箇所や問題点を洗い出し、改善する。
- **防災訓練**
  いざというときのために、地域一丸となって訓練する。

災害時

人命を守り、被害の拡大を防ぐために行動します。

- **初期消火**
  出火防止や初期消火活動をする。
- **避難誘導**
  住民を避難所など安全な場所に誘導する。
- **救出・救助**
  負傷者などを救出し、応急手当てをする。
- **情報の収集・伝達**
  公的機関と連絡を取り合い、情報を住民に伝達する。
- **避難所等の管理・運営**
  避難所等で給食・給水活動などをする。

地域のイベントに参加しよう

仕事や子育てなどさまざまな理由で、日常的に自主防災組織の活動に参加できない場合は、防災訓練などの自主防災組織が主催する催しに参加したり、地域のサークルやボランティア活動、祭りや運動会といった行事に進んで参加し、地域の人々と顔見知りになっておきましょう。日ごろからのつながりが、災害時に大きな力となります。

要配慮者を支援しましょう

突然の災害に見舞われたとき、大きな被害を受けやすいのは、高齢者や子ども、障がい者、傷病者など、何らかの助けが必要な人です。こうした要配慮者を災害から守るために、地域で協力し合いながら支援をしていきましょう。

災害時におけるハンディキャップとは

1 危険を察知しにくい

危険を知らせる警告が聞こえない、見えない視聴覚障がい者など。

2 危険であることを理解・判断しにくい

日本語が分からない外国人、判断力が弱い知的障がい者、乳幼児、地理に疎い旅行者など。

3 危険に対して適切な行動がとれない

肢体が不自由な傷病者・障がい者、高齢者、妊婦など。

平常時にやっておきたいこと

●要配慮者の身になって防災環境の点検を

耳や目の不自由な人や外国人向けの表示はあるか、放置自転車などの障害物はないかなど、要配慮者に対応した環境づくりを心がけましょう。

●日ごろから積極的なコミュニケーションを

どこにどんな状態の要配慮者がいるのか、災害時にどのような支援が必要かを把握するためにも、日ごろからのコミュニケーションが大切です。

●地域での具体的な支援・協力体制を決めておく

一人の要配慮者に対して、複数の住民で支援するなど具体策をあらかじめ考えておきましょう。

災害時にやるべきこと

●すぐに状況を伝える

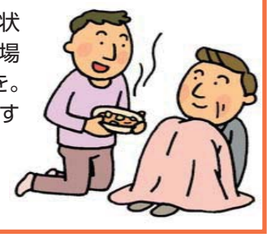
突然災害が起きれば、誰もが不安になります。筆談や身ぶり手ぶりなど、できる限り要配慮者の状態に合った方法で状況を伝えましょう。

●安全な場所に誘導する

自分の体を守ることができない要配慮者には、すばやく頭などを保護し、安全な場所に誘導します。一人で誘導するのが難しい場合には、まわりの人に協力してもらいましょう。

●困ったときこそ温かい気持ちで対応を

非常時にこそ、不安な状況に置かれている人の立場に立ち、支援する心構えを。温かい思いやりの心で接するようにしましょう。



災害時に手助けが必要な人は

災害時に何らかの手助けを必要とする人やその家族は、日ごろから積極的に防災訓練に参加したり、近隣住民にどんな援助をしてほしいのかを伝えておきましょう。

また、北方町は避難行動要支援者名簿を作成しています。名簿掲載の対象でない方でも、災害時の避難に支援が必要な方は、お申し出いただいたうえで必要な情報を名簿へ登録しておきましょう。